

発達障害児のための学校支援ボランティア事業 (3) — 3年間を振り返って—

吉岡恒生* 相馬慎吾** 野澤宏之*** 原恵美子**** 村松麻美*****

*障害児教育講座

**愛知県立三好養護学校

***東京福祉大学

****学部支援課

*****豊田市立若園小学校

Volunteer Support for Children with Developmental Disabilities in School(3) — Three Years' Practice —

Tsuneo YOSHIOKA*, Shingo SOMA **, Hiroyuki NOZAWA ***
Emiko HARA**** and Asami MURAMATSU*****

*Department of Special Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Miyoshi School for The Mentally Retarded, Miyoshi 470-0213, Japan

***Tokyo University of School Welfare, Nagoya Campus, Nagoya 460-0002, Japan

****Division of Faculty Support, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

*****Wakazono Elementary School, Toyota 473-0923, Japan

1. はじめに

2006年度より文部科学省より委託を受け、愛知教育大学が行った「特別支援教育を核に、実践的教育力育成を目指す教員養成改革事業」は、2008年度をもってその3年計画の終わりを迎えた。その事業の一環として筆者らが立ち上げた「発達障害児のための学校支援ボランティア事業」も、予算が措置された事業としては一区切りをつけることとなった。

特別支援教育が本格実施された2007年度をはさんだこの3年間は、小・中学校における発達障害児への教育にとって大きな変革期であった。特別支援教育コーディネーターが各学校に配置され、コーディネーターの取り回しのもと校内支援委員会が始動し、特別支援教育体制が整備されていった。特別支援学級の児童・生徒のみならず、通常学級の児童・生徒にも個別的教育支援計画が策定される例が増加していった。まだまだ充分ではないにせよ、一般教員にも特別支援教育の重要性が認識されるようになってきた。LD, ADHD, 高機能自閉症等の言葉が学校現場に浸透していき、そうした発達障害を有する児童・生徒を理解しようとする動きが高まっている。

ところが、いざ発達障害を有する児童・生徒への教育実践に目を移すと、特別支援教育の理念、発達障害

についての知識の広がりによって飛躍的に進歩したかと言えば、そうとも言えない。特別支援教育の考え方が広がるにつれ、保護者・関係機関との連携など、特別支援教育に関わる新たな問題点が露呈した面も多々ある。しかし、新たな問題点が露呈することも、特別支援教育の改善を促す働きがある。

そうしたなか、筆者らは、この3年間の事業を通して、立ち上がったばかりの特別支援教育の現場を体験する貴重な機会に恵まれた。この事業は、発達障害児への対応に苦慮し彼らを支援する学生ボランティアを求めている学校側のニーズと、教育実習のみにとどまらず教育現場で継続的に実践を積むことによって将来の教員としてのスキルを向上させたいという学生側のニーズをつなぐものであったが、当初の目的は達成されたであろうか。

本論文では、派遣先へのアンケートと、演習の最後に行った学生達の「ふりかえり」によって、3年間の事業の総括をしていきたい。

2. 3年間の事業概要

まず3年間の事業概要について述べていく。一昨年度の紀要(吉岡ら, 2008)に全体の概要は詳述しているので多少繰り返しになるが、全体像を示した上でアンケート結果等を紹介した方がわかりやすいと思われる

るため、簡潔に記載する。

(1) 学校支援の流れ

この派遣事業の特色は、ボランティア学生に対して手厚い支援を行い、また学校-学生間の連携をスムーズに行うために学校支援コーディネーターと呼ばれるスタッフを2006年度は3名、2007、2008年度は4名配置したことである。

基本的には、教員（1名）・学校支援コーディネーター（4名）が各教育委員会・学校を通じて連絡を取り、何らかの支援が必要とされる児童・生徒に対して人材の確保をしたい、という学校側の要望を確認するという方法で派遣先の学校を決定した。また大学側は、教員が全体の統括を行い、学校支援コーディネーターはそれぞれ担当地区を決定、教育委員会・学校・学生間で必要な連絡・連携は担当ごとに受け持つ体制をとった。教員とコーディネーター間は週1回全体会議を持ち、情報の共有と方針検討を行うようにし、きめ細かい運営が行える体制をとった。

上記の派遣先の確保と並行して、自主的にボランティアに参加したいという学生を、学内掲示板及び大学HP、及び大学ガイダンス時に募集した。ボランティア参加にあたって、各学生には個人情報に関する守秘義務の遵守と個人の支援員としての資質向上に努めることを義務付け、同意できる者のみ登録可とした。ボランティア登録後、学生の参加可能な条件に応じて派遣先の割り振りを行い、地区に応じて担当となるコーディネーターが決定される仕組みとした。担当コーディネーターは学校と学生の調整だけでなく、学生の指導・相談も受け持った。ボランティア開始に当たっては、派遣予定の学生は事前に教育委員会・学校へ訪問・面接を行い、可能な限りコーディネーターも同行するようにし、十分な相互理解と情報の共有が持てるよう留意した。

派遣開始後は、定期的に学校と連絡を取るようにし、相互に現在の状況を把握しつつ支援が継続できるように留意した。ボランティア学生は、一回の活動毎にボランティア活動記録を所定の用紙に記入し、学校とコーディネーターに提出することとした。また、学生からはなかなか訴えにくいような事柄について、教員・コーディネーターが必要に応じて学校と学生の調整も行うよう配慮した。

登録学生に対しては、月2～3回程度、土曜日に2時間程度の演習を行った。学生には、演習への参加を義務付けた。演習は、外部から講師を招いての講演会、各コーディネーター単位のグループワーク、発達障害への理解と対応を深める勉強会を軸に実施した。講演会の講師には、特別支援に理解のある現職教諭、発達障害児を持つ保護者、医師など様々な角度から特別支援教育・発達障害に関する知識と技術について話題提供してもらい、より広い視点からそれらについて

の洞察を深める機会を設けるようにした。グループワークでは、各コーディネーターと現在の支援状況に関して相談できるよう毎月1回確保した点が特徴といえる。また、同じボランティアに従事している学生同士で互いの情報を交換できること、同じ悩みを共有することで、活動に対する安心感や連帯感を感じることが出来る時間としても機能した。

(2) 3年間の派遣実績

2006年度は、愛知県内の小中学校20校・知的障害児通園施設1園について、43名の学生を派遣し、延べ2200時間以上の支援を行った。2007年度は、愛知県内の小中学校24校・保育園1園について、52名の学生を派遣し、延べ3800時間以上の支援を行った。2008年度は、愛知県内の小中学校12校・保育園1園について39名の学生を派遣し、延べ3300時間以上の支援を行った。学生の内訳としては、2006年度は障害児教育課程以外の学生が26名、2007年度は39名、2008年度は35名と、特別支援教育を専攻していない学生が多いことが特徴である。派遣先としては、教員養成課程の過密カリキュラムの影響か、大学の近隣の小・中学校が多いのが特徴である。また、概算要求事業が終わり、学校支援コーディネーターを始めとした予算措置の切れた2009年度は、2008年度から継続する学生を中心に12名の学生が小・中学校に派遣されている。

3. 支援先へのアンケート結果

(1) アンケートの概要

このアンケートは、学校支援ボランティアで学生が実際に支援を行っている学校を対象に行ったものである。このアンケートは2009年2月上旬に各派遣先の学校に配布し、同月の末日までに回収したものである（15校配布、12校回収。回収率80%）。アンケートは全て選択による回答方式をとっており、ここではそれらを集計し、簡単ではあるが考察をしていく。質問項目によっては複数回答する場合もあり、その場合は延べ数で集計をした。

実際に学生ボランティアが支援に入っていたクラスとその支援形態であるが、普通学級が9名、特別支援学級が5名である。各内訳については表1のようになっている。各学級の合計と内訳の合計が違っているが、これは1人の学生が複数の学年に支援に入ることがあるためである。支援の形態では、チーム・ティーチング(TT)による支援が11名、個別の支援が3名、取り出しによる支援が3名、その他として交流学习への付き添いなどが1名で

表1 派遣学生内訳

普通学級		9名
内訳	1年生	6名
	2年生	7名
	3年生	3名
	4年生	3名
	5年生	5名
	6年生	3名
特別支援学級		5名

あった。

(2) アンケート結果

i. 2008年度の学校支援ボランティア活動について

①「児童・生徒の成長にとって、学生ボランティアは役に立っていると思えますか？」という項目においては、「とても思う」と答えた学校が全体の75%（9校）であった。次いで「やや思う」が25%（3校）、「あまり思わない」と「全く思わない」は0校であった。

②「先生方の指導上、学生ボランティアは役に立っていますか？」という項目では、「とても役に立っている」と答えた学校が全体の75%（9校）で、次いで「やや役に立っている」が25%（3校）であった。「あまり役に立っていない」と「全く役に立っていない」は0校であった。

③「学生ボランティアは、学校側の負担になっていませんか？」という項目においては、「全く負担になっていない」と答えた学校が全体の67%（8校）であった。次いで、「あまり負担になっていない」が33%（4校）であった。「やや負担になっている」と「とても負担になっている」と答えた学校は0校だった。

④「③の負担になっている理由として当てはまると思われるものはなんですか？（複数回答可）」という項目では③の質問で「全く負担になっていない」と答えた学校以外の4校に回答を求めた。その結果、【制度的な問題】として、「担当するクラス配置を考える」が25%（1回答）、「支援に入るクラスの時間割変更」が25%（1回答）であった。【派遣内容や学生に対すること】については、「支援内容についての学生への指示・説明」は50%（2回答）、「支援時における学生への説明」は25%（1回答）の回答があった。それ以外の「学生の指導能力」や「具体的な支援体制」には回答がなかった。【周囲への説明・同意】については「担任の先生の同意を得る」に50%（2回答）の回答があったが、それ以外の項目には回答がなかった。【環境的な問題】については「学生分の給食の手配」が25%（1回答）で、

「学生の着替え場所などの確保」には回答がなかった（表2参照）。複数回答数の割合は、1回答した学校が1校（25%）、2回答が1校（25%）、3回答が2校（50%）であった。

⑤「学校支援コーディネーターは役に立っていたと思えますか？」という項目では、「とても思う」と答えた学校が全体の59%（7校）であった。次いで、「やや思う」が25%（3校）で、「あまり思わない」が8%（1校）であった。「全く思わない」が0校で、無記入が1校あった。

⑥-1「⑤の理由として当てはまると思われるものはなんですか？（複数回答可）」という項目で「とても思う」「やや思う」に回答した10校では、【調整役】について「学校と学生の調整が充分できていた」が40%（4回答）であった。「学校と学生の調整ができていなかった」への回答はなかった。【学生への対応】については、「指導ができていた」が60%（6回答）、「教育相談ができていた」が20%（2回答）であった。「指導ができていなかった」と「教育相談ができていなかった」への回答はなかった。【学校への対応】については、「満足のいく訪問がされていた」が30%（3回答）であったが、「満足のいく学校訪問がされていなかった」が10%（1回答）であった。【専門的な立場】については「心理検査・知能検査などの査定作業」が20%（2回答）、「専門的・具体的な支援方法の説明」が20%（2回答）であった。【周囲への説明・面談役】としては「保護者への説明・面談」が20%（2回答）、「担任への説明・面談」が20%（2回答）であった（表3参照）。無記入を除いた複数回答数の割合は、1回答が4校（36%）、2回答が3校（27%）、3回答が2校（18%）、4回答が1校（9%）、5回答が1校（9%）であった。

表3 「学校支援コーディネーターが役に立っていたと思う」と回答した理由

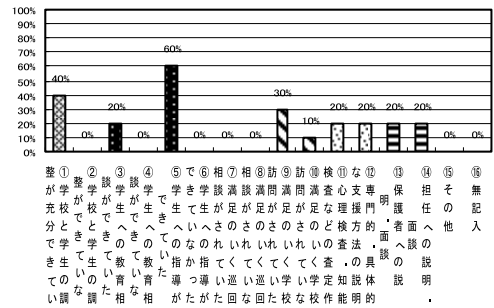
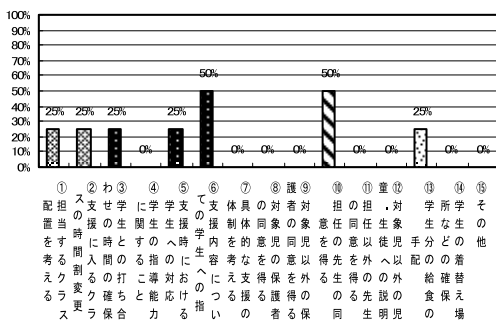


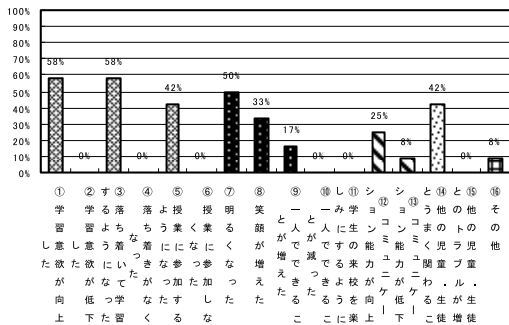
表2 負担と思われる理由は何ですか



⑥-2「⑤の理由として当てはまると思われるものはなんですか？（複数回答可）」という項目で「あまり思わない」に回答した1校では、「その他」として『学級の状況が不安定で、来校してもらう機会が作れなかった』と記述があった。

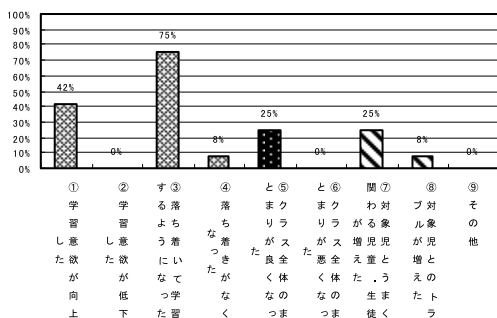
⑦「現在、ボランティアがついている児童・生徒に変化はありましたか？（複数回答可）」では、【対象児の学習面】については、「学習意欲が向上した」が58%（7回答）、「落ち着いて学習するようになった」が58%（7回答）、「授業に参加するようになった」が42%（5回答）であった。「学習意欲が低下した」、「落ち着きがなくなった」、「授業に参加しなくなった」への回答はなかった。【対象児の生活面】については、「明るくなった」が50%（6回答）、「笑顔が増えた」が33%（4回答）、「一人でできることが増えた」が17%（2回答）であった。「一人でできることが減った」、「学生の来校を楽しみにするようになった」への回答はなかった。【対象児のコミュニケーション】については、「コミュニケーション能力が向上した」が25%（3回答）、「コミュニケーション能力が減少した」が8%（1回答）であった。【他児との関わり】については「うまく関わるが増えた」が42%（5回答）で、「トラブルが増えた」への回答はなかった（表4参照）。複数回答数の割合は、1回答が2校（17%）、2回答が3校（25%）、3回答が1校（8%）、4回答が3校（25%）、5回答が2校（17%）、8回答が1校（8%）であった。

表4 児童・生徒に変化はありましたか？



⑧「現在、ボランティアがついているクラス全体に変化はありましたか？（複数回答可）」では、【クラスの学習面】については、「落ち着いて学習するようになった」が75%（9回答）、「学習意欲が向上した」が42%（5回答）であった。「学習意欲が低下した」には回答がなく、「落ち着きがなくなった」は8%（1回答）だった。【クラスの生活面】については、「クラス

表5 クラスに変化はありましたか？



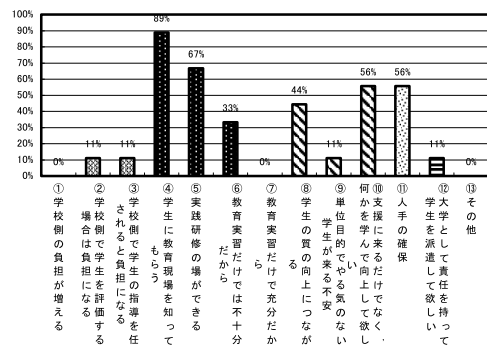
全体のまとまりが良くなった」が25%（3回答）、逆に「まとまりが悪くなった」への回答はなかった。【対象児との関わり】については、「うまく関わる児童・生徒が増えた」が25%（3回答）で、「トラブルが増えた」は8%（1回答）であった（表5参照）。複数回答数の割合は、1回答が6校（50%）、2回答が4校（33%）、4回答が2校（17%）であった。

ii. 2009年度以降における学校支援ボランティアの在り方について

①「単位化する必要があると思われますか？」という項目においては、「とても思う」と答えた学校が全体の33%（4校）、同じく「やや思う」が42%（5校）で、合計すると「思う」と回答した学校は全体の75%（9校）であった。「あまり思わない」は17%（2校）で、「全く思わない」は8%（1校）であった。

②-1「①の理由として当てはまると思われるものはなんですか？（複数回答可）」で「とても思う」「やや思う」に回答した9校では、【学校側】に関するものとして「学校側が学生を評価する場合は負担になる」が11%（1回答）で、「学校側に学生の指導を任せられると負担になる」が11%（1回答）であった。【学生の実践活動】については「学生に教育現場を知ってもらう」が89%（8回答）、「実践研究の場ができる」が67%（6回答）、「教育実習だけでは不十分だから」が33%（3回答）であった。【学生の態度】については「支援に来るだけでなく、何かを学んで欲しい」が56%（5回答）、「単位目的でやる気のない学生が来るのが不安」が11%（1回答）、「学生の質の向上につながる」が44%（4回答）であった。【人手の確保】については56%（5回答）であった。【責任の所在】については「大学としての責任を持って学生を派遣して欲しい」が11%（1回答）であった（表6参照）。複数回答数の割合は全体で1回答が1校（8%）、2回答が5校（42%）、3回答が1校（8%）、4回答が1校（8%）、5回答が2校（17%）、6回答が2校（17%）であった。

表6 単位化の賛否について「必要があると思う」と答えた理由

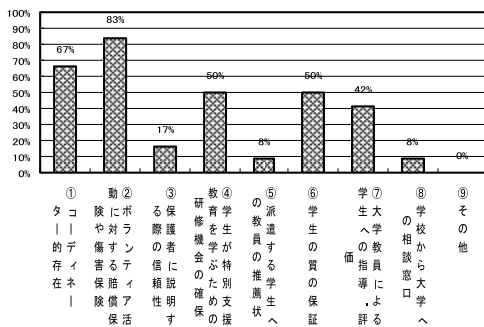


②-2「①の理由として当てはまると思われるものはなんですか？（複数回答可）」で「あまり思わない」「全く思わない」に回答した3校では、【学生の実践活動】について「教育実習だけで充分だから」が33%（1回答）、【学生の態度】について「単位目的でやる気のない学生が来る不安」が100%（3回答）、「その他」の自由記述として、『志の高い学生に来て欲しい』という内容が書かれていた（1回答）。

③「来年度も支援を希望されますか？」という項目においては、「希望します」と答えた学校は全体の75%（9校）であった。「希望しません」と答えた学校はなく、「どちらともいえない」が25%（3校）であった。

④「今後、学生を受け入れるにあたり、最低限必要だと思われるものはなんですか？（複数回答可）」では、「ボランティア活動に対する賠償保険や傷害保険」が最も多く、83%（10回答）であった。次いで、「コーディネーター的存在」が67%（8回答）、「学生が特別支援教育を学ぶための研修機会の確保」が50%（6回答）であった。以下は、「大学教員による学生への指導・評価」が42%（5回答）で、「保護者に説明する際の信頼性」が17%（2回答）、「派遣する学生への教員の推薦状」が8%（1回答）、「学校から大学への相談窓口」が8%（1回答）であった（表7参照）。複数回答数の割合は、2回答が2校（17%）、3回答が6校（50%）、4回答が3校（25%）、5回答が1校（8%）であった。

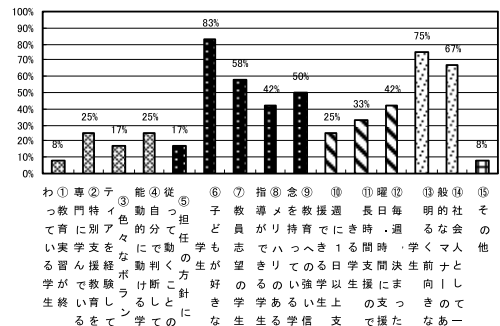
表7 受け入れにあたり、最低限必要なものは？



⑤「どのような学生を希望されますか？（複数回答可）」では、【質的・能力的】なものとして、「特別支援教育を専門に学んでいる」が25%（3回答）、「自分で判断して能動的に動ける」が25%（3回答）、「色々なボランティアを経験している」が17%（2回答）、「教育実習が終わっている」が8%（1回答）であった。【教育者としての態度】としては、「子どもが好き」が最も多く83%（10回答）であった。次いで、「教員志望」が58%（7回答）、「教育への強い信念を持っている」が50%（6回答）、「メリハリのある指導ができる」

が42%（5回答）、「担任の方針に従って動くことができる」が17%（2回答）であった。【時間的なこと】については、「毎週、決まった曜日・時間に支援できる」が42%（5回答）、「長時間支援できる」が33%（4回答）、「週に1日以上支援できる」が25%（回答）であった。【一般的・社会的な態度】については「明るく前向き」が75%（9回答）、「社会人としての一般的なマナーがある」が67%（8回答）であった。「その他」の8%（1回答）では、「やる気のある学生」と書かれていた（表8参照）。複数回答数の割合は、2回答が2校（17%）、3回答が2校（17%）、4回答が1校（8%）、5回答が1校（8%）、6回答が1校（8%）、7回答が2校（17%）、9回答が2校（17%）、12回答が1校（8%）であった。

表8 どのような学生を希望されますか？



⑥「派遣の頻度はどのぐらいが適当だと思いますか？」では、選択ではなく数字を記入してもらい、「2～4」などのような記入の仕方の場合には、和が1になるように2時間、3時間、4時間のそれぞれに1/3ずつカウントするようにして集計をした。その結果、【月に何日ぐらいが適当ですか？】という質問では、「4日」が1番多く60%（7 1/5回答）、次いで「5日」が18%（2 1/5回答）、「8日」が18%（2 1/5回答）であった。「6日」、「7日」は2%（1/5回答）であった。【1日は何時間ぐらいが適当ですか？】では、「4時間」が1番多く40%（4 5/6回答）であった。次いで、「2時間」が28%（3 1/3）で、「3時間」が24%（2 5/6回答）であった。「6時間」が8%（1回答）であった（表9、10参照）。

表9 月に何日ぐらいが適当ですか？

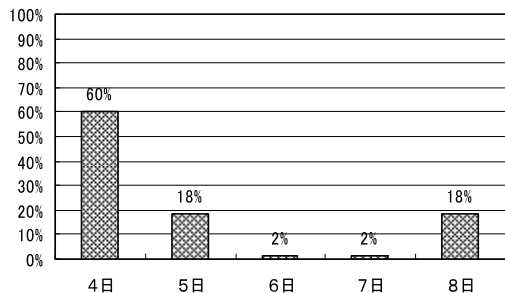
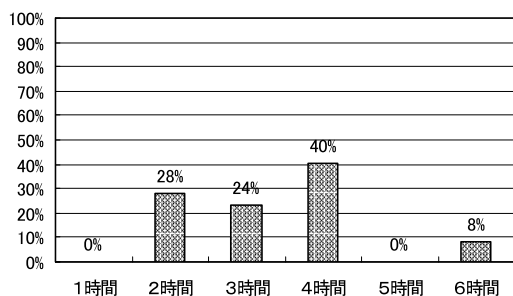


表10 1日に何時間ぐらいが適当ですか？



(3) アンケートの考察

i. 2008年度学校支援ボランティア活動についての考察

アンケート項目①と②の結果では、学生ボランティアが子どもたちにとっても、先生の指導上においても「とても役に立っている」という意見が7割以上もあり、「やや役に立っている」と答えた学校も含めると、全ての学校から「役に立っている」という意見が得られた。この結果からも学校支援ボランティア派遣事業は一定の成果をあげたものと考えられる。

項目③では学生を受け入れることについて、7割近くの学校から「全く負担になっていない」と回答があったが、残りの3割の学校では、なんらかの負担を感じていることが考えられる。項目④でその理由について質問したところ、「支援内容についての学生への指示・説明」と「担任の先生の同意を得る」が50%（2回答）であったことから、初めて学生の受け入れをお願いする学校については、学校支援ボランティア派遣事業の主旨の説明や、具体的な支援の入り方などをお互いによく話し合っていくことが必要であると思われる。また、多数の学生を受け入れている学校からは、「担当するクラス配置を考える」や「支援に入るクラスの時間割変更」などの意見もあり、学生の派遣可能な曜日や時間帯の詳細をまとめたりするなどの必要があると考えられる。

項目⑤「学校支援コーディネーターは役に立っていたと思えますか」では、「とても思う」と「やや思う」を合わせて8割以上の学校から「役に立っていた」という意見が得られた。その理由として項目⑥では、「学生への指導ができていた」が60%（6回答）と1番多かった。また、学校によっては、「心理検査・知能検査などの査定業務」や「専門的・具体的な支援方法の説明」、「保護者への説明・面談」、「担任への説明・面談」といった回答も見られ、コーディネーターそれぞれの専門性が評価されたと考えられる。これは、学校とコーディネーターとの連携が丁寧に行われ、うまく機能していたことが考えられる。しかし、「あまり思わない（8%）」と無記入（8%）などからも連携がうまくいかなかったと思われる学校もあり、その理由として、『学級の状況が不安定で、来校してもらう機会が作

れなかった』との記述からも学校側とコーディネーターとの調整不足などがあげられる。より深い連携を図るためにも、コーディネーターから派遣先の学校への丁寧な連絡と定期的な学校訪問などが積極的に行なわれることが必要であると思われる。

項目⑦では、対象児の学習面について「落ち着いて学習するようになった」が58%（7回答）、「学習意欲が向上した」が58%（7回答）であった。また、項目⑧では、クラス全体でも「落ち着いて学習するようになった」が75%（9回答）であることから、学生が学級に入り、対象児に支援を行うことで対象児以外のクラス全体にもよい影響があったことが考えられる。しかし、1部では学生が支援に入ることによって「クラスの落ち着きがなくなった（8%）」と答えている学校もあることから、支援の入り方に関しても考えていかなければならない。

ii. 2009年度以降における学校支援ボランティアの在り方についての考察

項目①の「単位化する必要があると思えますか？」では「とても思う」、「やや思う」を合わせると7割以上の学校から「必要がある」という意見が得られた。その理由（項目②-1）については、「教育現場を知ってもらう」というような【学生の実践活動】に関することが多かった。しかし、単位化について「必要がない」という意見が25%（3校）あり、その理由（項目②-2）については、「単位目的でやる気のない学生が来る」が100%（3回答）、また、「教育実習だけで充分だから」という回答が33%（1回答）であった。これらのことから、単位化については今後、さらなる検討が必要である。

項目④の「受け入れにあたり、最低限必要なものはなんですか？」では、「賠償・傷害保険」が1番多く83%（10回答）であった。次いで、「コーディネーター的存在」が67%（8回答）、「学生の質の保証に関すること」が50%（6回答）であった。受け入れに対しては、保険加入はもちろんのこと、やはり学校と学生をつなぐ役割をもつコーディネーターの存在が必要になってくる。これについては、予算の都合も関係してくるので、難しい課題である。

項目⑤「どのような学生を希望されますか？」では、大きく分けると「子どもが好き（83%）」、「教員志望（58%）」などのような【教育者としての態度】に関することが多かった。次いで、【一般的・社会的な態度】に関することであった。このことから、特別支援教育を専門に学んでいるというような【質的・能力的】なことよりも、気持ちの部分が重視されているように思われる。派遣する際には、これら学生一人ひとりの教育者としての気持ちや態度といったものをどのように育てていくことができるかも考えていかなければなら

い。

項目⑥の派遣の頻度については、月に4回（週に1日）程度が60%（7/15回答）と1番多く、1日の時間数については4時間が40%（4/6回答）で1番多かった。このことから、週に1日、曜日を決めて午前中の4時間程度の支援が程よい支援と思われる。

4. 派遣学生のふりかえり

（1）グループワークにおける「ふりかえり」

先述のように登録学生には土曜日の演習への参加を義務付けた。その演習の目玉として月1回学校支援についてのグループワークを行い、学期の終わりに1年の終わりに「ふりかえり」を記入してもらった。それらの記述は、客観的なアンケート以上に、学校支援に赴く学生たちの心情を浮き彫りにしているため、今回はその代表的な声を紹介したい。

①これまでの学校支援実践で1番印象に残ったのはどんなことですか？

- 1) 1年前と比べて、担当の児童が学習面でもコミュニケーションの面でも格段に成長している様子が見られたとき、すごくうれしかったし、支援してきてよかったと思った。
- 2) 自分の関わった子が、今までできなかったことが少しでもできるようになったこと。そのために、自分も試行錯誤しながら学び対応したこと。
- 3) 1時間集中して授業に取り組むことがあまりない支援児童が、自分の声かけによって、頑張って1時間集中して取り組むことができた授業。発言まででき、皆の前で拍手を受けたときの児童のうれしそうな顔が印象的だった。
- 4) 対象の児童は調子が悪いときは手や足が出てしまう子だが、周りの子たちはそういう場面以外では普通に仲良くしていること。
- 5) 支援の対象児童がクラスの中でどんな存在であるかということ（あまりいい言い方ではないが扱われ方）が、クラスごと、担任の先生ごとに違うという印象を受けた。
- 6) 30分放課に特別支援学級の子どもたちが演奏会を開いたとき、多くの通常学級の子どもたちが集まって一緒に楽しんでいったこと。
- 7) 授業中に離席する子に対し注意しても効果がなかったのに対し、目を合わせてゆっくりと大きな声で話すことで言うことを聞いてくれるようになった。
- 8) 子どものことが少しずつわかるようになってきて、表情や仕草から衝動的な行動に移る前に体ごと止めることができるようになったこと。
- 9) 支援に入っていくうちに発達障害児やその他の子どもとの関係を築くことができ、支援に来るのを楽しみにしてくれるようになったこと。また、支援がうまくなったこと。

10) 対象児となかなかうまくコミュニケーションが取れず悩んだこともあったが、その分、その子がたまに声をかけてくれたり、あいさつをしてくれるといったことも、とても嬉しく感じ、支援に対する自分の行動などを考えさせられた。

11) 1人の子どもに関わる先生、保護者、私たちボランティアの3者の考え方はいろいろで、必ずしも一致するわけではないなかでの支援の難しさ。自分のしている支援が、その子にとってどう役立っているのか、その展望が見えてこない場合はつらかった。

12) 「児童の立場や目線に立って」という言葉がどれだけ難しいかを実感した。対象児に付きっきりでも支援が成功することは少ないのに、学級担任になったらその子1人に割ける時間はもっともっと少なくなる。現場での支援の難しさを実感した。

②学校支援実践を通して、あなたは自分自身についてどんなことに気づきましたか？

- 1) 戸惑うことばかりで、自分はまだまだ知識不足だと痛感した（1年生）。
- 2) 全然周りを見ることができなくて、狭い視野でしか物事を見ることができていなかった。
- 3) 頭で考えてもなかなか実行に移せない。瞬時に考えることができないので、やるが遅れてしまった。
- 4) 支援を実際に行ってみて、自分自身は知識が先に立って、「どうしよう!」と困ってしまうことが多いと思った。
- 5) 子どもがやるべき行動があるのに違う行動をしている場合、話を聞きすぎてしまったり、追いかけてこ状態になったりしたことがあった。区切りのつけ方をうまく促すことができない。
- 6) 臨機応変に対応することが全然できないなと思った。
- 7) けっこうせっかちで、意識しないと口出しをしてしまう。自分自身が疲れていると、支援を受けている子もだだらしてしまっていた。
- 8) 「こうしたほうがいい」と自信を持って思えるときは行動に移せるが、「こうしたらどうかな」とか、「うまくいくかわからないけど試してみよう」というときは消極的になってしまう。
- 9) 「〇〇すべき」という「べき論」だけでは通らないことがあることを身をもって知った。理想論がある上で、現場ではそうも言ってもらえないという先生の姿を見て、大変さを知った。優しすぎて強く言えない自分がいることを知った。
- 10) 支援についての自分の知識の少なさ、勉強の必要性を感じた。また、学校支援においても人間関係においても、誠実な対応をしようという意識が重要だと強く感じた。

11) 支援するときに、子どもの行動に対する「反応」しかできていないということに気づいた。子どもがこうしたからああする、という感じ。そうではなくて、自分の意図やねらいをもって支援したい。

12) 対象児との関係がうまくいっていなかったとき、「これを言ったらダメかな」などと迷って、結局その子に何も声をかけられなかった、ということがよくあった。けれど、思い切って言葉にしてみると、案外それに応えてくれることもあり、「考えるよりもまず実行」ということを心がけたいと思った。

13) 支援者がやらせたいと思ったことよりも、児童がやりたいこと、好きなことから始めてやらせたほうがうまくいくし、結果的に本人もいやな気持ちが残らずに次につなげることができたので、自分の思いと児童の思いのバランスが大切だと思った。

14) 自分がよかれと思ってしてあげたことが、必ずしも対象児が喜んでくれたり受け入れてくれたりするとは限らないこと。

15) 事なかれ主義というわけではないが、なるべく声などを荒げずに、子どもに気づいてもらおうという指導をしている気がする。最近その限界を感じて変わりつつあるが。

16) 自分から話しかけて子どもたちとしゃべったり、遊びに誘ったりするよりも、子どもたちから話しかけられて話を聞いたりするほうが好き。でも、教師になって担任をもつようになったら、子どもたちをひきつける話をしたり、周りの状況から判断して子どもたちを引っ張っていかないといけないから大変だと思った。

17) 子どもと関わり支援がうまくいくことで次にまた「頑張ろう」という気持ちになる。

18) 自分の声の大きさ、テンポ、姿勢などなど、普段意識しない自分の行動を振り返ることができた。

19) 昨年よりは成長できたと思う。学校へ行くのが楽しい。子どもがかわいい。勉強の教え方の工夫、子どもへの声かけがうまくなった。周囲とのクッションになれるようになった。

20) 初めはどんな対応をしてよいのかわからず、自分がパニックになっていたが、少しずつどのような指示をすればよいかわかるようになった。改めて子どもが好きだということに気づいた。障害児に対して偏見を持たなくなった。

21) 子どもに対する接し方が変わってきた。以前よりも子どもの気持ちになって考えることができるようになってきた。

22) 自分が子どもに遠慮がちだったことに気づき、引き時と攻めるときの差をつけることができるようになった。

23) 支援をしている子に対して、クラスの子がどう思っているのか、また自分自身が支援することで周り

の子がその子を特別視してしまうのではないかと常にどこかで気にしている自分がいた。周りの目ばかりを気にして、本人に対してもごきごきない態度で接してしまっていたように思う。(1学期)

→すぐに介入するのではなく、しばらく子どもの様子を見てから介入することが多かった。自分が支援している子が、先生や周りの児童からどう思われているのか、支援をしていることで特別視されるのではないかとという不安が、1学期のときよりも軽くなったように思う。教室の中でその子ができることをみんなと同じ空間でやることに意味があると思うようになった。(2学期)

(2) 「ふりかえり」についての考察

①学校支援実践で1番印象に残ったこと

1) から3)は「子どもの成長」、4)から6)は「対象児への周囲の反応」、7)から9)は「支援者としての自分の成長」、9)と10)は「子どもとの関係の深まり」、11)と12)は「支援の難しさ」とまとめることができる。

ボランティアであるからには、役に立たねばならない。「子どもの成長」を挙げた記述からは、学校支援ボランティアが、発達障害児の支援という点で有効な手段であることがうかがわれる。「支援者としての自分の成長」に関わる記述からは、この事業が「将来の教員としてのスキルを向上させる」という学生側のニーズに合致していることがわかる。「対象児への周囲への反応」を見ると、学生たちが学校現場での発達障害児を客観的に観察し、現場に関わる実践的な感覚を養っていることがわかる。「子どもとの関係の深まり」は、教育という営みが、ボランティアであろうとも、人と人との関係の上に成り立つものだということを示唆している。「支援の難しさ」という印象はマイナス面の印象であるが、これから教師になる学生が理想のみならず現実を知ることによる実践活動の意義があるのである。

②学校支援実践を通して自分について気づいたこと

「支援者としての自己の未熟さについての気づき」に言及する者が最も多かった。1)から9)がそれである。「未熟さ」の内容は様々である。学校支援実践に当たり、学生たちは自分の弱点に向き合うことになる。たとえば、1)では「知識不足」を挙げているが、4)では「知識が先に立つ」ことを挙げている。相反する性質がともに弱点になりうるのである。その他「狭い視野」「柔軟性のなさ」「消極性」「優しすぎる」など、教師として自立するためにネックとなりうる自分の性質について学生たちは気づいていく。こうした自らの弱点に気づくことが、より良い教師になるための出発点なのである。

10)から18)の記述では、1)から9)の記述に比較

して、自分の未熟さに気づいた上でどう対応していけばよいかについての自分の考えが述べられている点で、一歩進んだ自己洞察となっている。「誠実な対応」「支援者の意図やねらい」「考えるよりもまず実行」「自分の思いと児童の思いのバランス」「事なかれ主義の限界」「ひきつける会話」「普段意識しない自分の行動を振り返る」などがそのキーワードである。

19) から22) の記述では、「支援者としての自己の成長」について言及されている。これらの気づきを言及した者は、支援が二年目に入っている学生が多いのが特徴である。（4名中3名）

23) の記述は、1人の学生の1学期における「ふりかえり」と2学期における「ふりかえり」を対照させたものである。学生が支援を重ねる過程で内的に成長していく様子が見えてくる。

5. 参考文献

吉岡恒生・柴田和美・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・山内麻美 発達障害児のための学校支援ボランティア事業 一初年度の取り組み— 愛知教育大学研究報告題57輯（教育学編） 愛知教育大学 2008 pp.119-128

（2009年9月16日受理）